

長崎に関する野口彌太郎の日記について

入江 清佳

はじめに

野口彌太郎（一八九九―一九七六）は、大正から昭和にかけて二科会及び独立美術協会に所属、活躍した洋画家である。

流暢な筆致と天成のものとして評される色彩¹に特徴を持ち、昭和四年（一九二九）にヨーロッパに渡ると、『門』『巴里の眺』フランス市庁買い上げとなった『港のカフェ』など洒落な作品を描いた。帰国後は、昭和五年（一九三〇）に二科会から独立し結成された独立美術協会に在籍し、独立展を中心に活動する。国内を広く旅し、土地の風景やその中で生きる人々を生き生きと描いている。昭和二十年（一九四五）以降は戦前から取材していた北海道と、父親の出身地である長崎を特に熱心に描いた。

野口が長崎を頻繁に訪れた昭和二十年代から三十年代にかけては、中央画壇で活躍する画家たちが多数長崎を訪ね、団体展が盛んに行われた時期でもある。長崎でも昭和二十年十月に長崎洋画クラブが結成され、昭和二十五年（一九五〇）には長崎市美術振興会が創立、同年十一月には第一回長崎市美術展（現在の長崎市民美術展）が開催されるなど、美術振興に対する機運が高まっていた。

野口の画業については、昭和五十三年（一九七八）に発行された日動出版の『野口彌太郎画集』に歴代の代表作及び年表等が記載され、基礎資料となっている。また、阿野露団の『長崎を描いた画家たち（上）（下）』⁵には、長崎での活動の様子が事細かに記載され、展覧会図録や地方新聞などにも野口について書かれたものが多くみられる。本稿では、長崎市野口彌太郎記念美術館が所蔵している「野

口彌太郎日記」の紹介とともに日記に記された内容をこれまでの野口に関する先行研究と比較することで、野口の長崎での活動とそれを受け入れた在郷美術団体や個人について若干の考察を加え史料紹介を行う。

第一節 野口彌太郎と長崎 ―野口家と幼少期の彌太郎―

野口彌太郎は、明治三十二年（一八九九）東京府東京市本郷（現在の文京区本郷）に父野口彌三、母信の長男として生まれた。父、彌三は、肥前国北高来郡小野村（現在の諫早市小野町）の出身で野口家は代々佐賀藩諫早家に仕える士族の家系であった。野口の祖父にあたる野口久四郎は、明治維新以降、藍の研究や甘藷の奨励など当地の殖産興業に尽力した人物で、その人徳から長崎県会議員を務め、諫早銀行の創立にも関わっている。

父彌三は、明治二十七年（一八九四）に第五高等中学校本科（現在の熊本大学）を卒業、帝国大学法科大学（現在の東京大学）に入学、卒業後は第一銀行本店に入行し、韓国・仁川支店、東京本店、神戸支店、大阪支店の各支配人を経て、大正九年（一九二〇）に常務取締役となった。彌三はこれらの転勤に家族も同伴しており、野口は幼少期を国内外で生活することとなる。野口は幼少期から虚弱体質で、明治四十四年（一九一七）から半年ほど、長崎県北高来郡小野村立小野尋常小学校に転入学している。これは、都会よりも自然の多い土地で生活することで心身の健康を願った父彌三の思いからであった。この転入が、野口と長崎の初期の接触であろう。後に美術雑誌への寄稿文などで諫早を「郷里」として度々紹介しており、自らの原点となる土地という意識を持っていたようだ。

第二節 日記から見る長崎での活動について

(一) 日記について

野口彌太郎の日記について、美術評論家の土方定一が『野口彌太郎画集』の中で以下の通り述べている。「野口彌太郎はパリ滞在から歿年まで、小さなノートに細字で丹念に日記をつけており、毎日勤勉に制作し、またマテイス、その他の展観を熱心に見てまわったことを書いている。ただ、残念なことに事実だけを正確に書いていて、小さなノートのためあつてそのときどきに見た展覧会などの感想が一切書かれていない¹⁰」この言葉通り、手帳は多少サイズが異なるが縦12.0×14.7cm×横6.7×9.5cm程度の小さなものである。見開きで一週間分書き込めるものがほとんどだが、見開きで四日、二日分のももみられる。万年筆や鉛筆で書かれており、インクが薄くなっている部分、滲んで文字の判別が難しい部分もある。日記の内容は日々の記録が主だが、絵の販売や日用品購入の収支、関係者のアドレス、写生旅行先の関係連絡先、関わった展示会のメモなどが見られる。なお、長崎市野口彌太郎記念美術館所蔵分には土方が言及しているパリ滞在時の日記は含まれておらず、一番古いもので昭和九年（一九三五）、新しいもので



野口彌太郎日記（長崎市野口彌太郎記念美術館所蔵）

昭和四十八年（一九七三）となっている。また、この期間の日記が全て揃ってはならず、欠落している年や無記名のももみられる。当該資料の先行研究としては、長崎市野口彌太郎記念館発行の『野口彌太郎研究資料 野口彌太郎の日記帳記載内容』があり、昭和九年から昭和十二年（一九三七）、昭和三十一年（一九五六）から昭和三十六年（一九六一）、昭和四十八年の計十一冊が翻刻されている。

また、日記の他にもメモ帳、アドレス

帳、野口の妻である野口菊枝の日記、野口や周辺画家に関する新聞記事のスクラップ、絵画制作時に参考にしたと思われる写真や切り抜きのスクラップブック、書籍類が長崎市野口彌太郎記念美術館に所蔵されている【表1】。

(二) 日記から見た戦前の長崎訪問

画家となった野口が長崎を描くのは、昭和二十一年（一九四六）だがそれ以前も野口は長崎を訪れている。昭和十年（一九三五）の日記に、諫早及び長崎滞在の記載がある。独立美術協会第五回展の福岡巡回展（四月二日～十一日）の際に諫早、長崎へ滞在しており、四月十一日の日記には長崎を訪れ市内を巡り「風景の変化大いによし」とある¹²。また、昭和十六年（一九四一）上海、南京にて独立美術協会会員展が開催されており、帰国の際に船で長崎に入港している¹⁴。この時の街の印象について「その滞在中の長崎の街の印象は、特に出島辺りから海岸通りにかけて残っている明治洋館の風

種類	冊数
野口彌太郎日記	33冊
野口菊枝日記	8冊
メモ帳	21冊
アドレス帳	2冊

【表1】野口彌太郎・菊枝関連直筆資料

情、石畳、建物の間に点在する石碑、標石などが、過去の変遷に直結していることに、ひどくひかれたことだった。」と昭和五十年（一九七五）七月八日の長崎新聞記事で述べており、長崎の画題としての魅力を早い段階で認識していたことがわかる。しかしながら、当時の長崎は要塞地帯であり、町の景色を写真や絵画で表現することが制限されていたため、絵を描くことはかなわなかった。

（三）両親の諫早隠棲と長崎での活動

戦後、野口の両親は郷里の諫早へ隠棲する。日記によると昭和二十一年（一九四六）十一月二十一日に両親を訪ね諫早へ帰省。翌昭和二十二年（一九四七）四月三日まで滞在し、江の浦、戸石、長田、有喜、長崎などを訪ねており《漁村（江の浦）》や《裏町》などを制作して

いる。¹⁶この時期のことを「長崎の町の様子が気になって出かけるのであるが、戦争中のあの物々しい目隠しはすっかり取り払われて、山々の姿も海の眺めも、いかにも自由に生き返って見える。懐かし



野口彌太郎日記 昭和25年(1950)1月22日~28日
(長崎市野口彌太郎記念美術館所蔵)

い長崎独特の石畳もしごく健在であった。」と書いている。¹⁷この帰省で野口は三度長崎の町を訪れ、大浦天主堂をはじめとした、大浦辺りのスケッチを行っている。

昭和四十八年（一九四八）には、福岡で独立展巡回展が開催。この時、長崎で画材屋の「光風堂」を営んでいた榎村正直が訪れ面識をもつ。また、同年長崎・浜屋二階ホールにて「野口彌太郎・山本正洋画展」が開催され、長崎洋画クラブが開催に助力している。その際メンバーの一人だった諸谷義武¹⁸と知り合いとなる。¹⁹後に、両者共に野口の長崎滞在時の活動を支える存在となっていく。

以降、野口は精力的に長崎での創作活動を行い、長崎を描いた作品を発表し続けた。長崎の美術界関係者の協力の下、昭和二十三年（一九四八）「野口彌太郎・山本正洋画展」、昭和二十五年油絵四人展野口彌太郎、山本正、松島正人、吉岡憲²¹、昭和二十七年（一九五二）長崎風物・長崎の女・独立五人洋画展「野口彌太郎、吉岡憲、李田たけを、山本正、末永胤雄²⁴」が開催される。また、戦後初の独立展開催にも尽力し、昭和二十七年（一九五二）「第二十回独立展」が長崎市立勝山小学校講堂で開催された。以降、二十二回展（一九五四）二十三回展（一九五五）、二十四回展（一九五六）、二十五回展（一九五七）、二十六回展（一九五八）、二十九回展（一九六一）、三十一回展（一九六三）、三十三回展（一九六五）、三十六回展（一九六八）、四十三回展（一九七五）六十三回展（一九九五）が長崎を巡回している。²⁵

記載年	滞在期間	年齢	主な行動
昭和10年(1935)	4月9日～4月13日	36	4月10日墓参り、11日～13日長崎市内を見て回る
昭和21年(1946)	11月21日～	47	諫早、江の浦、長崎、戸石、長田で制作活動
昭和22年(1947)	～4月3日	48	1月4日～7日諫早で講習会及び写生会の指導を行う。2月8日長崎で座談会に参加。3月18日長崎アンデバンダン展に3作品を出品。戸石、長田、有喜、長崎で制作活動
昭和24年(1949)	1月8日～1月30日	50	1月12日～14日佐世保で洋画展を行う。1月24日、27日諸谷氏との交遊
昭和25年(1950)	1月2日～3月1日	51	1月25日～29日油彩四人展[野口彌太郎、山本正、松本正人、吉岡憲]。2月4日諫早で講習会。1月11日第十七回独立展佐賀巡回展。1月14日永井隆博士と面会。雲仙、長崎で創作活動。佐賀美術関係者、長崎文化協会、長崎洋画クラブとの座談会
昭和26年(1951)	4月26日～5月20日	52	5月19日～20日三人展「松島正人、林田重正、野口彌太郎」。5月14日永井隆博士の市葬の様子を描く。大浦、浦上で制作活動
昭和27年(1952)	2月16日～4月30日	53	2月1日～10日第二十回独立展長崎巡回展。2月21日長崎美人絵画会、3月21日～24日長崎風物・長崎の女・独立五人洋画展[野口彌太郎、吉岡憲、李田たけを、山本正、末永胤生]長崎展示会、3月28日～30日諫早展示会、4月22日～23日佐世保展示会。諏訪神社、大浦、島原で制作活動
昭和28年(1953)	4月16日～5月15日	54	4月18日父彌三亡くなる、20日告別式。27日鶴見荘で山下正の作品を見る。大浦・茂木で制作活動
	8月18日～9月14日		9月2日四海楼マダム告別式へ出席。6日支那盆を見に行きスケッチを行う。長崎・雲仙で制作活動
昭和29年(1954)	2月7日～3月1日	55	4月18日父彌三一周忌。長崎・佐世保で制作活動
昭和31年(1956)	4月26日～5月20日	57	佐世保、西海橋、平戸、大浦などを訪れ制作活動
昭和32年(1957)	3月22日～7月17日	58	小野、東山手、網場を訪れ制作活動
昭和32年(1957)	6月25日～7月16日		佐世保、東山手荘、大浦下町を訪れ制作活動
昭和33年(1958)	6月25日～7月16日	59	6月25日～諫早市からの依頼で移築保存前の本名川に架かる眼鏡橋を描く。東山手で制作活動
昭和34年(1959)	2月8日～3月24日	60	2月8日～児童画の審査委員を務める、10日授賞式。2月18日父・彌三の七回忌。稲佐岳、諫早、野母、島原、加津佐、小浜、悟真寺の外国人墓地を訪れ制作活動
昭和44年(1969)	10月13日～10月18日	70	10月14日～16日第十三回県展審査委員を務める。東山手12番館、茂木、野母を訪れ制作活動
昭和47年(1972)	5月15日～5月24日	73	諫早市民センターの壁画制作のため諫早、有田長崎を訪れる。
昭和46年(1973)	2月16日～2月18日	74	17日長崎市民会館、浦上国際文化会館隣地、平和記念像、諫早体育館を訪れる。
	11月5日～11月28日		長崎の山々を墨絵、水彩などで描く。翌年完成する、長崎市民会館の陶板壁画の制作のため有田、波佐見を訪れる。

【表2】野口彌太郎日記に記載された長崎での行動

(四) 昭和二十五年の日記
 今回、野口が長崎に滞在活動した期間について、抽出したのが表2である【表2】。今回は、その中でも、油絵四人展「野口彌太郎、山本正、松島正人、吉岡憲」を開催し、代表作《長崎の夕暮れ》を制作した昭和二十五年に注目し【表3】にあらわした。

【1】一月十一日～十二日 ―佐賀に巡回した独立展に向く―
 一月十一日から野口は、独立美術協会の若手洋画家山本正と松島正人を伴って佐賀に滞在している。日記の記載によると昭和二十四年(一九四九)に行われた独立美術協会第十七回展が佐賀に巡回しておりこれに足を運んだようだ。²⁷「当地画人とzadankai」とあることから、独立展開催に伴い佐賀を訪れた会員たち、野口、山本、松島らが当地の画家たちと交流をもったことがわかる。戦後、長崎でも度々中央画壇の画家と在郷画家の座談会や講習会が行われ、長崎美術界の刺激ともなっていた。この年、長崎でも長崎洋画クラブや長崎国際文化協会との座談会が実施されており、中央と地方を結ぶ催事が長崎、佐賀共に盛んだったようだ。

【2】一月十四日～十六日、一月十八日
 ―永井隆博士を見舞う―

日記によると、野口はこの日來訪した、「杉山」という人物と浦上方面へ出かけている。この人物について、阿野露団の『長崎を描いた画家たち(上)』は、「長崎大学教授であった杉山炬火氏」と比定している。²⁸野口はこの人物と純心女学園、セント・フランシスコ病院を訪問したと書いている。その後、永井隆博士に面会するため如己堂を訪れ「3Fスケッチ」を行うとある。翌十五日の日記に「3F

を試みる。」とあり、この日に前日のスケッチを元とし、油彩画を制作したと思われる。この作品は、キャンバスサイズ、年代から現在長崎市立永井隆記念館所蔵となっている《永井博士像》と考えてよいだろう。『野口彌太郎画集』によると《永井博士像》は二枚制作されており、一枚は野口の親族が所蔵している。

《永井博士像》は一月十六日に完成。新聞社に届けたと書かれている。《永井博士像》は、同月開催された油絵四人展「野口彌太郎、山本正、松島正人、吉岡憲」に初出品されている。ここに書かれている新聞社とは展示会を後援していた長崎日日新聞と思われる。展示会終了後の二月十八日「杉山先生に永井博士像をとって付けてもらふ」とあり、この日永井博士の手元へ二枚の内一枚の絵が届けられた。

野口は昭和二十六年（一九五二）の『小説新潮』に一月十四日の如己堂の様子を書いている。

昨年春に永井隆博士を浦上の寓居に訪問して横臥する博士の肖像を描いた。三畳の間に博士のベッドがあり私は画枠を窮屈に立て、身動きも自由でない。南面の障子を開いて、やつと博士と画面が見通せる。私は病室に気兼ねしてタバコを吸つたのだが、博士は私が仙人の様に煙をはいて描いていたと後で感想を語るして²⁹いた

また、二年後の昭和二十七年二月一日〜一〇日に行われた、戦後初の長崎独立展では、永井博士の葬儀風景を描いた《長崎の離別（副題：永井博士の昇天）》が出品されている。この作品は、昭和二十五年の面会の際に「来年また肖像を描きに来きます。」と交わした約束が元となり制作されたものである。³⁰

【3】一月十九日〜二十一日 ―島原での制作活動―

野口の描いた長崎県内の代表的な画題の一つとして、島原が挙げられる。昭和三十二年（一九五七）発行の『繪のふるさと』では「私は雲仙の中の山々をいろいろ歩いて見ましたが、雲仙を一望に見るところとしては、絹笠山の頂上からの全景は良いものだと思います。」と述べている。

昭和二十九年（一九五四）の『旅』第二八巻第一号にこの時の旅の様子書かれている。雲仙の自然の美しさと地元の人々の純朴さを紹介する記事だが、以前雲仙で写生を行った際にシルバーホワイトに硫黄が反応し灰色に変色したこと、それ故に今回はジンクホワイトを連れ立った三人とも持参したと写生についても触れている。³¹

この時、ゴルフ場でF3号、小地獄でF3号のスケッチを試みているがこの時期の雲仙を描いた作品は『野口彌太郎画集』の中には見られない。同書にて雲仙の風景画が登場するのは、昭和二十八年（一九五三）からである。この年は、国立公園絵画展が九月十五日から二十日まで東京三越で開催され、日記及び『野口彌太郎画集』によると二十五号の《雲仙》が出品されている。野口は同年八月十八日から九月十四日まで諫早に滞在し度々雲仙を訪れており、日記には二十五号の作品を制作している記載があることから、この時《雲仙》が描かれていたと考えられる。現在《雲仙》は財団法人国立公園協会所蔵となり、国立公園絵画八〇景の一枚として紹介されている。³²

	2月5日(日)	(長早講習会)
	2月6日(月)	(諫早-長崎) 12h小野発-諫早で松島君と分れ長崎へもどる夕、之代として5,000-母へ渡す。3h-日□れで木村娘肖像6F夕食後四海楼でたへすぎて散歩。
	2月7日(火)	日美アンデパンダン出品に間に合はづと菊枝磯谷へ電報。弦月会濱辺方へ打電。10,30h model。木村娘うまく出来ず中食三人 松君と兩人で700,-後大浦へ行き寫生6F二枚サワノ君一緒。帰館。中村宅訪問。夕食後エチオピアでのみ帰館12h
	欄外: WED1,600-竹筆代 FRI5,000-母へ SAT700-中食	
	2月8日(水)	南風カフェ-中村邸に行き窓外写生。6F二枚。雨終日。スンを馳走になり宿へかへる。松島君工合悪く一人外出。四海楼で酒をのむ。山を歩きまわり2h帰館1,000,-
	2月9日(木)	松島君具合悪くてドクター来診。女中心付200,-電報料など 400,-南風にコーヒー 120,-ランニング en uecafas280,-光風堂。Hairlo200,- 加筆。夕食は今日ではじめて宿でとる 酒又本。 預けた内から36000,-受取る
【5】	2月10日(金)	小品加筆、正村氏来館。大島夫人来訪で母へのものことつける。ドロップス:ジャム:マームレード:パンの□な 550,- 木村女来訪、5時50Fふきけして新にコンポジション樺村氏から吉岡作品代8000,-受取る諫早講習会謝礼として(4000)
	2月11日(土)	(湊臺アンデパンダン会合)欠席 終日雨で夜で作品加筆。7h松島君と諸谷家によばれる。松崎、山田、先生等と大いによび同家に泊す。眼鏡をこぼす。
	欄外 SUN (7500,-)、MON800、TUES-1000,- (20,000)、WED450,-カステラ 100,-タバ75 bus、THURS400,- 200,-、FRI550,- (吉岡代8,000-)、SAT (4,000 - 諫早講習会謝礼)	
【5】	2月12日(日)	(諸谷家)朝食をすまし諸谷家を辞す。50F加筆二日目。木村女来訪など 眼鏡屋行きレンズと修理をたのむ山にて色紙をかく。だいぶ酔ふ
	2月13日(月)	4h山からおりる ひるね 光線工合悪く50手がつけれぬ。夕食四海楼でかるくたべて帰館
	2月14日(火)	夕方まで色紙の色つけをする 8h中村邸訪問夕食馳走になる。10時半かへる
【5】	2月15日(水)	3hから10Fをもつて外出。活水をまわり大浦教会の辺をまわり宿へかへって10F試みる。5時 - 6時50F加筆。四海楼にて四皿くらい大いにのむカツワリの10Fをmadammにとゝける正木君来訪
	2月16日(木)	午後から50F加筆。夕方になり急に50Pを新にする。小林明君の居てっちりを馳走になる。帰へって美帳の原稿をかく。
	2月17日(金)	樺村氏来訪 千代田銀行サワノ氏訪問。作品をとゝける。支店長面会。大阪行作品荷づくり。JTB訪問。加筆二日目50P。JTB訪問。荷物発送。諫早の少年二名来訪。加筆。四海楼35,000,-から15,000,-引出し
	2月18日(土)	12h朝日生命訪問。中野氏をbus待合所で話し。6F、3Fを会計20,000として父母への立替へをすませる。杉山先生に永井博士像をとゝけてもらふ50P加筆三日目。四海楼で色紙をかく。
	2月19日(日)	50Pは晴れてかゝれず。3h町を散歩の後6F二枚を大浦活水の付近でかく。光美しい 山を散歩する。
	2月20日(月)	2h江山楼でチャンポンをたべる700,-宿でひるね 光風堂で6F二枚5 - 6.30h 10F一枚。大浦の橋のところ8h四海楼でたべる
	2月21日(火)	千代田銀行サワノ君訪問 6F代(山の眺) 15,000 - 受取り。トコヤへ行く。Underwear 等3500 - 南風でコーヒー。目鏡屋2300,- 靴3690,-活水6F、大浦で10F加筆。10F新に一枚日本料理をたべる1600,-wine600,-おそくかへる。
【5】	2月22日(水)	今日も光強く50Pはかけず大浦へ出る。6F半かきにやめ昨日の10F橋の絵をかく。帰館四海楼で千代田、佐々木店長、サリノ、日銀、藤澤氏を招待大いにのむ色紙などかき2,30hかへる 大いにのむ。
	2月23日(木)	のみすぎで1h頃までねる。サワノ氏来訪。6F港の絵をとどける。50P三日目、光線強くなかなか進まず ソバをたべキッサ店でウイスキー 800,- ハサミ120,-
	2月24日(金)	書面せーり、電報料、その他1030,-
	2月25日(土)	(空欄)
	欄外 TUES (15,000 -)山の眺、WEDUnderwear 3500,-、THURS眼鏡修理、レンズ2300,-、FRIShoes 3650 ,-、SAT夕食1600,-600,-	
【5】	2月26日(日)	大浦を歩きまわり、大浦で10Fをやりしくじり6Fをかく。帰宅用意荷づく大体をやる
	2月27日(月)	12h銀嶺にヴェルニーに行く。サワノ氏から15,000,-受取る。50P最後の筆を入れる。30分くらいか。四海楼で夕食。帰宅用意しばらく。
	2月28日(火)	用意と加筆。色紙などをとどける。諸谷氏来訪カステラ。日本画代として10,000,-サワノ君と佐藤高令5h大浦で写生 - 7h近くまで30P仕上南風。帰宅荷づくり樺村君。俵電佐藤高令訪問。10h30四海楼で夕食主人に馳走になる。光風堂支拂
	3月1日(水)	(長崎発) 8h起床大あわて 8.30h千代田の車で駅へ出る。チッキなど樺村君いろいろ世話になる。諸谷氏方日本画2,000 - 受取る。夕方8h頃からウイスキーをのむ。大いによふ永井完君同車。松島君は岡山で下車。ウニ、カキ(広島)などを求める。マダムに4,000,- 心付として渡す。

【1】	1月7日(土)	(長崎着)7h長崎着。駅前風物よし。光風堂。宿でひるね。杉山君と会ふ。宿をさがして歩く。鶴見荘旅館に泊す。四海楼中食と夕食に出る。アトリエのkeyを受取る。shienso800,-
	1月8日(日)	諸谷家、中村家訪問。旭生命で中村氏と面会 20,000 - 立□光風堂、4 - 5h天守堂上で写生6F8F宿へかへり四海楼で夕食ウイスキー Shienso:酔目1hにかへる1000-
	1月9日(月)	杉山君来訪でおこされ打合せ。朝食後一同で外出朝日生命、長崎日々、博物館、諸谷邸、光風堂、コーヒー帰館。4h発busで小野へもどる。カステラ
	1月10日(火)	(小野-佐賀) 9h小野発諫早本駅で正林氏出迎へカステラ店に小休 10h発山本、松島君と同行佐賀着、会場から□へ行き一同と出会う 4h当地画人とz adankaiをする。酒1200,- 500,-
	1月11日(水)	(佐賀-長崎) 朝食一同後会場へ行き独立展17回を見る。中食後2,25h発長崎へもどる 四海楼に行きウイスキーをのむ土産 400,- soups 170,- □?
	1月12日(木)	手紙かき十五人展の速電来り打電す。海辺で写生6F2枚。夜にかへり杉山君来訪。夕食。雨。うどん届。Shienso,korona かへってウイスキーをのみ1hねる。1700,-
	1月13日(金)	ハガキ三通来る。佐世保は不可能の□なり。今日は外出せず作品加筆。杉山先生来訪。三人そばを食べエチオピアその他へ行きむ。
	1月14日(土)	(浦上行) 杉山氏来訪 山本君工合悪くて同行せず純心女学園、セントフランシス病院訪問。院長に面会。永井博士訪問 3Fにスケッチを二枚試みる。杉山氏と四海楼でのむ
	欄外:TUES1200,- 500,- WED400,- 510,- THURS700,-	
	【2】	1月15日(日)
1月16日(月)		杉山先生来訪。永井博士像を新聞社へとくける。光風堂。大浦へ写生に出るモテーフを見て歩く。30Pを試みるが半□帰館。榎林氏来訪で酒をのみ夕食馳走になる。四海楼に休みコロナ：エチオピアへ行く。
1月17日(火)		杉山先生訪問。九州土建訪問、中田氏不在。南風、山本君は駅へ荷をとりやく旧四海楼から佐古小学校付近を歩いて四海楼で中食。夜女中に600,-
1月18日(水)		10.30h正林、田尻君来訪。一緒に出て四海楼で中食後大浦を歩きまわる。今日スケッチはせず6h両君帰る。夕食四海楼へ行く。
【3】	1月19日(木)	(長崎-雲仙) 9,30 h Busで雲仙へ12h着 杉山先生に迎へらる本湯叙館にやどる。中食後ひるね。夕食後dance- 入浴でさわぐ
	1月20日(金)	(雲仙)ひる頃ゴルフ場へ行き3Fをかく。後小じごくで3Fスケッチ。夕食後色紙、画帳をかく。宮崎、富貴楼主人入室。
	1月21日(土)	(雲仙-長崎) ゆっくりおきる。午後から昨夜の色紙に色つけ。色紙二枚代として6,000-受取り。宮崎、富貴旅館。夕食をすませ5,20h出発長崎へもどる。四海楼でのみ。エチオピアなど 2時帰館。
欄外:TUES600,-女中心付 SAT (6,000-)色紙二葉		
【4】	1月22日(日)	山本君はやはり帰へることになった。10,000-受取り。作品用意など。3hベイロンでteaの後小林宅にゆき酒をのみ800-夕食。四海楼。エチオピア、ダンスホールへゆく。500,- 田岡でのむ800,-
	1月23日(月)	山本君の帰京をおくりやく。大阪□業、長日社、朝日生命中村氏訪問。同行してkangin、千代田生命、肥塚高産等を訪問。郵便局、光風堂で目録額ぶちをよる。小林君訪問正木君訪問。四海楼で夕食一緒。早くかへる。
	1月24日(火)	(カザリつけ)作品加筆。会場へはこぶかざりつけ 終って小林君等と四海楼によりのむ
	1月25日(水)	(四人展初日)父来館。正林氏来館。会場へ行く。二時-三時石田、中田等長崎国際文化協会と記者と座ダン会。父をおくってトマトケチャップ、リンゴ等土産 夕食四海楼すこし料理引くたべる。正木君同席。後のみ歩き2h
	1月26日(木)	正林君(四人展) 松島君のエと文。長日に出る。来場者甚だ多数。へとへにつかれる。日本銀行支社長、藤澤氏訪問。小野家訪問。サンパツ。すこしジンをのむ。正木家によれば大いによつてかへる。
	1月27日(金)	(四人展)正林氏 今日の夕刊タイムスに大々的に記事出る。入場大いに多し。小林君をさそい小川宅によばれる。アトリエを見る、後ベイロン。エチオピア等でのむ2h帰館。
	1月28日(土)	(四人展)午後会場。終って四海楼でかるく夕食。かへって入浴後松島君と同行長崎洋画クラブの座ダン会に出席二時間半 帰って四海楼へ行きすこしのむ。後松島とmountain
	欄外SUN (10,000)受取り内2,000-山本-3,000-松島 MON800,- 500,- 800,	
【5】	1月29日(日)	(四人展終了) 今里氏来長。30Pの寛上の話し。会場で今里、他親和銀の人達と諸谷氏で出会四海楼へよばれる。55,000-ときめる。会場へもどる。終って半□の作品を宿へ運ぶ 四海楼で夕食簡単にすませ 帰館9.30hからねる。
	1月30日(月)	親和銀行から電話など。光風堂でVerni末永娘作品をもつて来訪。30P張りなほしとverni。書面をかく。中食は今日初めて四海楼からとどけてもらふ入浴後cinema。Pa□img blubで夕食2,000,- エチオピア：dumen等小林敏夫氏代金受取り(17,000,-)
	1月31日(火)	湧泉の表紙。一月末日迄。光風堂から諸谷氏代金受取り(11,000-)女中Tip 300,-つ 山□(4,000-)50号をかしもとして用意する。四海楼で色紙をかくこととして よふ
	2月1日(水)	3h - 530h 50Fを窓からかく。どうしたものが気持悪くふらふらなる。夕食は四海楼で簡単に食事。
	2月2日(木)	(長崎) 12-1 h 浜屋食堂で市の連中と座ダン会。南風でTea。3h活水で洋画部の連中と座ダンの後6F二枚をさく。小林長太先生に馳走になり丸山の新茶屋大いにのむ 5000,-
2月3日(金)	(長崎) ゆっくりおきる。深野君来訪。	
2月4日(土)	(諫早絵講習会)	
欄外：謙 在京 27Dce-12.3Jan		

【表3】昭和25年長崎滞在時の日記 昭和25年1月7日～3月1日

【4】一月二十五日～二十九日 ―油絵四人展の開催―

この期間、油絵四人展「野口彌太郎、山本正、松島正人、吉岡憲」が長崎浜屋二階ホールにて開催される。長崎での展示活動としては、昭和二十三年（一九四八）の「野口彌太郎・山本正洋画展」から二度目のものとなる。当該展示は独立美術協会の若い画家仲間とのグループ展で、国際文化協会主催、後援を長崎日日新聞並びに光風堂が行った。昭和二十五年一月二十六日付の長崎日日新聞では「現日本洋画壇の水準を抜く四画伯の力作三十余点はそれぞれの持ち味をいかに発揮しており、中央から遠い長崎において、現洋画壇の最高峰をきわめることが出来る絶好の機会として長崎洋画界はもちろん一般からも好評を博し盛況をよんでいる」と書かれている。日記にも二十六日に「来場者甚だ多数。へとへとにつかれる。」二十七日に「入場大いに多し」と当時の反響の大きさが書かれている。また、一月二十五日長崎国際文化協会、一月二十八日長崎洋画クラブと座談会を設けている点にも注目したい。長崎国際文化協会は、昭和二十四年（一九四九）に発足し、美術部門の劈頭の企画として油絵四人展を主催した。手帳日記にある「石田」は初代会長であった長崎地方裁判所長石田寿、「中田」は、副会長の中田博二で、この二人を含め、四人展初日関係者の座談会が行われたようだ。先述したように、長崎洋画クラブは、昭和二十三年「野口彌太郎座談会」「野口彌太郎・山本正洋画展」の開催を支援しており、以前から野口との繋がりがある美術団体である。中心人物で当時長崎市議だった諸谷義武はこの時のことについて「野口画伯に貴重な教えを乞うこともできました。」と述べている。³⁷

【5】二月一日～二十七日 ―《長崎の夕暮れ》の制作―

野口が長崎を描いた代表作に昭和二十五年制作の《長崎の夕暮れ》がある。この絵画と思われる50号作品について日記に記載があるので紹介したい。

《長崎の夕暮れ》は、野口の定宿であった東浜町の鶴見荘二階から夕暮れの長崎の町を描いた作品である。夕方から夜に移り変わる茜色の空が美しく、野口の好んだ移り変わる情景が迷いのない筆致で描かれている。³⁸復興途上の長崎の町には点景人物が配置され、動的な風景画となっている。³⁹昭和二十五年二月三日に医師で後に国画协会会员となった小林敏夫が野口の滞在していた、東浜町の鶴見荘にて、《長崎の夕暮れ》制作に立ち会っている。⁴¹50号作品の制作は二月一日から始まっているが、連日「光線強く進まず」の旨が描かれており、思うような風景が描けていなかったことがわかる。また、制作過程について小林が詳細な記録を残している。「解き油をたっぷり浸した大形の筆で性急にパレットの上で二、三の色を混ぜるなり、いきなり画面に緩急、夫々所を得た様に奔流の様に描いてゆかれる。じつと筆を止めて被写体を眺めては一気に筆をはこぶという具合なり。色調と形は対象を一つ一つ見ながら画面の上では、度々塗り消しされては再現してゆく。よくあれで色が汚く濁らぬものだと思う程である。：相当苦心して五十号の窓外風景とつくんでおられるが、案の如く、うまくゆかない様な言葉を漏らされる」⁴²野口の大膽な筆さばきに感嘆する言葉とともに、制作が不調であることがここからもわかる。

二月十六日の日記には「午後から50F加筆。夕方になり急に50Pを新にする。」⁴³とある。F50号の制作が二月一日より十六日、P50号の制作が十六日から二十七日まで行われており、少なくとも長崎

で二点《長崎の夕暮れ》が描かれたようだ。P 50号の制作については、二月二十七日の日記に「50 P最後の筆を入れる。」⁴⁴とありこの日に完成したと思われる。『野口彌太郎画集』には《長崎の夕暮れ》が二作品掲載してあるが、双方ともにキャンバスサイズはP 50号で二月一日から制作されたF 50号の掲載はみられない。また、画集掲載の内一点は日記には制作の記録が見られない。

《長崎の夕暮れ》のうち一作品は野口が東京に戻ったのち、同年五月十四日から六月七日まで開催された第四回美術団体連合展に出品された。『教育美術七月号』に、野口のアトリエを訪問取材した記事が掲載されておりその中に「画室には連合展え出品の五十号『長崎の夕暮』四点が並んでいる」⁴⁶とあり、少なくとも50号作品が四点制作され、完成後一時画室に飾られていたようだ。

おわりに

以上、長崎市野口彌太郎記念美術館所蔵「野口彌太郎日記」について、昭和二十五年の長崎滞在期間を対象に美術雑誌や新聞の記事なども含めつつ史料紹介した。同年、十一月二十二日～二十八日に第一回長崎市美術展⁴⁷が開催されるが、その推進母体は洋画家クラブを中心に日本画、工芸などの各部門を加え創立した長崎市美術振興会であった。長崎の美術界にとってもこの時期は一つの転機を迎えていたといえる。⁴⁸この機運は、長崎の画家たちの働きによるものと同時に、野口を始めとした中央画壇の画家たちとの交流や展示作品の観覧など刺激があった上でのものだと思われる。

昭和四十年代に入ると長崎を訪れる画家たちは減少する。直接的な理由としては、昭和三十八年（一九六三）頃から次第に戦後の海外渡航規制が緩和され、海外へ写生旅行が可能になったことにある。

また、三〇年代から複数の画家たちが言及していた、長崎の都市景観の画一化も一因であると言えよう。⁴⁹野口もこの点には危惧しており昭和二十七年（一九五二）二月六日の新聞に「今日の気持ちからいえば、長崎の道路はたしかに古くさくて歩きにくい。自動車は不思議な勾配の坂を登ったり、道路いっぱいな道を走ること、なる。しかしこゝに近代的な道路をつくるとなれば、わが尊重する長崎のフンイキは、随分こわされるだろう」⁵⁰と述べている。その後の昭和四十四年（一九六九）十月十七日の日記には「長崎の町のコンクリートの安物の眺どもエにならぬ」⁵¹と長崎の町の変化に対する嘆きが見られる。しかしながら、野口自身の来崎は死の前年、昭和五十年まで断続的に続き、変化する長崎の町を描き続けた。

長崎市野口彌太郎記念美術館所蔵の野口彌太郎日記は約二十年分あり、なおかつご遺族から今後研究に必須となる資料が多数寄贈されている。今後これらを分析することで長崎での野口の行動や創作活動を見直す契機になると考える。あわせて独立美術協会設立当初の様子や、交友関係など戦前戦後の中央画壇での活動についても検討が尽くされていない部分も多いことから今後の課題ととらえておきたい。

（長崎市長崎学研究所学芸員）

記載年	出来事	年齢
明治32年(1899)	10月1日、東京府東京市本郷区弓町(現在の東京都文京区本郷)に父野口彌三、母信の長男として生まれる。	0
明治44年(1911)	7月、長崎諫早の小野尋常小学校に転入学する。(翌年1月神戸市の諏訪山尋常小学校に転入学)	12
大正3年(1914)	4月、関西学院中学部(現在の関西学院高等部)に入学する。この頃から、絵を描き始め、絵画グループ弦月会に入って活動する。	15
大正10年(1921)	川端画学校に通うも2週間で中止。以後、独学で絵の修練を積む。	22
大正11年(1922)	豊多摩郡代々木本村にアトリエを新築。 第9回二科美術展覧会に初めて搬入した「女」が初入選。この年から二科展に作品が連続入選する。	23
大正14年(1925)	菊枝と結婚する。	26
大正15年(1927)	長男一太郎が生まれる。 この年、木下孝則、小島善太郎、前田寛治、佐伯祐三、里見勝蔵の五人により「一九三〇年協会」が結成され、薦められて同会会員となる。	27
昭和4年(1929)	5月、妻菊枝を伴い渡欧し昭和8年(1933)3月まで滞在。この期間に初期の代表作「門」「巴里の眺」フランス市庁買い上げとなった「港のカフェ」などを描く。	30
昭和8年(1933)	4年ぶりに帰国。折しも二科会から1930年協会が独立美術協会と名を変え分裂しており、両者から勧誘を受け独立美術協会に属することを決める。	34
昭和9年(1935)	第4回独立展に出品。この年からほぼ毎年独立展へ出品	35
昭和17年(1942)	1月上海を旅行し制作活動を行う。	43
昭和20年(1945)	1月、東京大空襲により、代々木の自宅が全焼する。この時、初期の二科展出品作や滞欧時の作品約300点が焼失する。	46
昭和21年(1946)	戦後、初めて諫早、長崎などを訪れる。翌年4月3日まで滞在する。この年から毎年のように長崎を訪れ制作活動を行う。	47
～	国内の様々な土地を訪れ精力的に制作活動を行う。	
昭和35年(1960)	5月、31年ぶりの渡欧。昭和37年(1962)帰国。ペラスケスやゴヤなどスペイン美術に感銘を受ける。	61
昭和39年(1964)	1月第31回独立展出品の「セビラの行列」および滞欧作品展の諸作によって、昭和38年度第5回毎日芸術賞を受ける。	65
昭和45年(1970)	2月、バリ島に写生旅行をする。香港、バンコクなどを経て5月帰国 6月、長崎県立博物館で「野口彌太郎展」開催 9月、渡欧する。11月帰国	71
昭和47年(1972)	1月、台湾を写生旅行する。5月帰国 紺綬褒章を受ける。	73
昭和48年(1973)	3月、第23回芸術選奨文部大臣賞の美術部門で、第11回国際形象展出品の「那智の滝」により芸術選奨を受ける。 5月、渡欧する。南仏やモロッコのタンジールに滞在し制作する。10月帰国。	74
昭和50年(1975)	4月、勲三等瑞宝章を受章する。 11月、日本芸術院会員となる。	76
昭和51年(1976)	3月14日、午前中からアトリエに入り、油彩の小品「カーニユの印象」を制作していたが、昼食後、脳卒中で倒れ同日21日死去する。同日正五位に叙せられる。	77

野口彌太郎年譜（『野口彌太郎画集』日動出版、昭和五十八年）

- 注
- 1 大塚信雄編『野口彌太郎画集』日動出版、一九八三年、一頁
 - 2 阿野露団『長崎を描いた画家たち(上)』形文社、一九八八年、二十二～二十五頁
 - 3 『長崎県教育史』長崎県教育委員会、一九七六、一一九三頁
 - 4 前掲注1
 - 5 前掲注2及び阿野露団『長崎を描いた画家たち(下)』形文社、一九八八年
 - 6 『諫早市史第四巻』諫早市役所、一九八五年、三五～三六頁
 - 7 前掲注1、一八五頁
 - 8 前掲注1、一八七頁
 - 9 野口彌太郎「緑の雲仙」(『繪のふるさと』、中央公論社、一九五七年)前掲注1、三頁
 - 10 『独立美術協会80年史』独立美術協会、独立美術協会80年史編集委員会、二〇二二年、一九二頁
 - 11 野口彌太郎「野口彌太郎日記 一九三五」四月十一日
 - 12 前掲注12、二〇五頁
 - 13 前掲注1、一九五頁
 - 14 長崎新聞、一九七五年七月八日号
 - 15 前掲注1
 - 16 長崎新聞、一九七五年七月二日号
 - 17 諸谷義武(一九〇七～二〇〇二)天草生まれ。昭和五(一九三〇年)長崎高商卒。一九五〇年前進丸漁業部創立。かたわら勧められて政界を志し、市議、県議を経て一九六七年長崎市長に選ばれ三期十二年、広域産業都市論を実践して市政を拡充した。県文化協会、美術

協会など地方分化の推進役として活躍（文化長官表彰、長崎新聞文化章受章）している。（『長崎県大百科事典』一九八四年、八四六頁）

¹⁹ 立花英伸編『諸谷義武伝』、出島文庫、二〇〇三年

²⁰ 山本正（一九一五～一九七九）大正四年岡山県生。京華中学校卒。里見勝蔵、野口弥太郎に師事。昭和六年独立展に《壁による男》が初入選、七年独立賞、二十三年岡田賞、二十四年同协会会员。三十一～三十二年「渡仏。日本大学芸術学部教授を歴任。五十四年九月二十六日、東京で歿、享年六十四歳。（『20世紀物故洋画家辞典』、美術年鑑社、一九九七年）

²¹ 松島正人は明治四十三年札幌生まれ。前田写真研究所、太平洋美術学校本科卒業。昭和六年、第十八回二科展に「花を持てる少女」二十号が初入選。昭和七年の第二回展から独立展に出品。（阿野露団『長崎を描いた画家たち（下）』形文社、一九八八年、二六二頁）

²² 吉岡憲（一九一五～一九五六）大正四年三月二十五日東京生。本名は祐晴。日本中学校在学中に川端画学校に通い、また声楽を学ぶ。渡欧を目的に出発するが、ハルピンに留まり、聖ウラジミール専門学校卒。昭和十五年帰国。十八年陸軍報道班員としてジャワに派遣され文化指導を行なう。独立展で《母子》が独立賞。二十三年独立美術協会会員。二十四年日本大学芸術部講師。日本国際美術展、アランダパンドン展にも出品。三十一年一月十五日、東京中野で事故死。享年四十歳。（『20世紀物故洋画家辞典』、美術年鑑社、一九九七年）

²³ 奈田たけを（一九一〇～一九八七）明治四十三年二月二十五日兵庫県豊岡市生。最初は日本画を学ぶが、洋画に転向。日本美術院に学ぶ。のちに須田国太郎に師事。昭和十年独立展に初入選。二十二年独立賞。二十四年美術協会会員。三十八年上京。六十二年八月八日、

東京で歿。享年七十七歳。（『20世紀物故洋画家辞典』、美術年鑑社、一九九七年）

²⁴ 末永胤生（一九一三～二〇〇九）大正二年長崎市生まれ。文化学院美術部卒。独立美術協会会員。昭和三十二年渡仏。サロン・アンデパンダン展会員・一九七二年コートダジュール国際展（カンヌ）グランプリ受賞。一九七九年紺綬褒賞を授与。（『長崎の肖像』形文社、一九九五年、四八一頁）

²⁵ 前掲注11

²⁶ 野口彌太郎『野口彌太郎日記 一九五〇』一月十日

²⁷ 佐賀巡回展は一九五〇年一月一〇日～二十二日の期間で玉屋百貨店が会場となった。主催は、佐賀県中央公民館、独立美術協会。（『独立美術協会80年史』前掲注11、二〇九頁）

²⁸ 前掲注2、一五〇頁

²⁹ 野口彌太郎「旅にて」（『小説新潮』、新潮社、一九五一年、三九頁）

³⁰ 長崎民友新聞、一九五二年二月一日

³¹ 野口彌太郎「をそそる九州の人情」（『旅』、財団法人日本交通公社、一九五四年、二八頁）

³² 財団法人国立公園協会

<http://sample.eic.or.jp/npaj/parks/picture/picture/not3.html>

³³ 長崎日日新聞、一九五〇年一月二十六日

³⁴ 野口彌太郎「野口彌太郎日記 一九五〇」一月二十六～二十七日

³⁵ 『長崎市制六十五年史』前編、一九五六年、長崎市役所総務部調査統計課、一〇一八頁

³⁶ 前掲注3、一一九三頁

37 前掲注19、一三一頁

38 はじめに申しました様に私は風景の中に何か人間の生活の息づかいがほしい。そうした気分は真昼よりも早朝とか、夕刻、そのうちでも特に後者の方に一そう切実に感じられる様に思います。それでも場合も夕刻を選びました。ところがこの時間は一日の中でも最も自然の変化のはげしい時です。それだけに又魅力があるといえましよう。(野口彌太郎「技法ノート 油絵②―風景の場合―」『美術手帳』美術出版社、一九五二年七月号、七一頁)

39 野口は風景画を描く心構えとしてこう述べている。「私は純粹な風景画(風景ばかりで成り立っている風景)にはどうにもあまり興味がわきません。風景の内に人間が何等かのかたちで生活している風景画と云ったものにひかれます。」長崎関連の風景画の多くに天描人物が配置され画面に躍動感を生み出している。(野口彌太郎「モチーフに就いて」『美術手帳』、一九五〇年、二二頁)

40 小林敏夫(一九〇四〜一九七三) 明治三十七年十一月兵庫縣姫路市生。昭和六年長崎医科大学卒。二十八年国画会展に初入選、三十五年同会会員。医学博士。昭和四十八年九月十五日歿。享年六十八歳。(『20世紀物故洋画家辞典』、美術年鑑社、一九九七年)

41 前掲注2、一四五頁

42 前掲注2、一四五〜一四六頁

43 野口彌太郎「野口彌太郎日記 一九五〇」二月一日〜二十七日

44 野口彌太郎「野口彌太郎日記 一九五〇」二月二十七日

45 前掲注1

46 佐波甫「野口彌太郎氏と語る」(『教育美術七月号』、一九五〇年)

47 前掲注35、一〇六〇頁

48 前掲注3、一一九三頁

49 『南山手の洋館 伝統的建造物群保存地区保存対策事業報告』(長崎市教育委員会、一九七七年、七十四〜七十五頁) 及び 『東山手の洋館 伝統的建造物群保存地区保存対策事業報告』(長崎市教育委員会、一九七七年、五八〜六〇頁)

50 長崎新聞、一九五〇年二月六日

51 野口彌太郎「野口彌太郎日記 一九六九」十月十七日

【付記】

本稿の執筆にあたって、以下諸氏よりご高配賜りました。皆様に對しまして心より感謝申し上げます。

野口彌太郎画伯ご子息 野口一太郎様

小島善太郎画伯ご息女 小島敦子様

独立美術協会会員 今井信吾様

独立美術協会会員 入江一子様

八王子市夢美術館 川俣高人館長並びに林彩子学芸員

長崎県美術館 野中明学芸員並びに松久保修平学芸員